

移動動詞の補語動詞転換と 結果構文への含意

加藤 鋳三・都築 雅子

1. はじめに

本稿では英語の補語動詞を考察する。「補語動詞」とは、補部に補語を取り得る動詞を指す。2節では、(i)英語の補語動詞の分布は他言語よりかなり広いことを観察し、(ii)それは典型的な補語動詞である become の前身が移動動詞であったことによる、という主張をする。また補語動詞転換には、[動詞+状態(移行)表現] という環境での動詞の様態表現化が関わっていると主張する。3節では、2節での考察が持つ結果構文への含意にも触れる。本稿の目的はもちろんタイトル通りに英語の補語動詞を考察することにある。しかしその考察は、現在準備中である結果構文研究の基盤の一部を成すものとするという意図の下になされるものである。

2. 英語の補語動詞

2.1 補語動詞の分布

英語の典型的な補語は、be, become, make によって導かれるものである。また、これらに準ずるものとして、「状態を保つ」という意味を持つ keep, stay 等、「状態変化が進行する」という意味を持つ grow 等がある。多くの言語では、補語動詞はこれらに限られるようである。

- (1) a. Bill is rich.

- b. Bill became rich.
- c. Computerization made Bill rich.

しかし英語においては、次に見るようにこれら以外の動詞が補語を取ることが観察されている。そのような動詞は、移動の意味を持つものに限られるようである。なおここでは、議論の不必要な煩雑化を避けるため、補語動詞の認定を「as 等なしで形容詞を取り得ること」とする。

- (2) a. Any idea in linguistics goes bad in six months if you don't publish it.
- b. Our dream came true only partially.
- c. This kind of examples will turn the author pale.
- d. Your comments drove the author insane.
- e. The author fell asleep when he was reading your comments on his analysis.

このような移動を表す動詞が補語動詞に転換可能であることについては、「状態変化は移動」という Lakoff (1993), Lakoff and Johnson (1999) のメタファーによって説明を与えられるという見込みがある。英語においてはそれでおよそのところは対処可能である。しかし本稿の目的は、補語動詞に関する考察を結果構文の分析に寄与させようというものである。よって結果構文の分布を視野に入れた考察をすることにしたい。

結果構文の統語的な特徴として、形容詞が通常は現れることができない位置に現れる、というものがある。例えば (3 a) では結果述語として形容詞が現れているが、いわゆる二次述語構文、すなわち結果構文と記述述語構文(4)以外では、形容詞がこのような位置に現れることはない。

- (3) a. John pounded the metal flat.
- b. John pounded the metal into a thin film.
- (4) John came into the room nude.

限定用法として名詞の前に現れる場合を除けば、形容詞が現れる位置は、通常の補語の位置か、(3)や(4)のような二次述語の位置に限られる。さて、結果構文では結果述語は行為の結果状態を叙述するものとされており、その機能はいわゆる SVOC 構文での目的格補語に近似している。そのため、移動動詞の補語動詞転換という現象は、結果述語の分布の分析に新しい知見を与える可能性がある。

そのような視点で、ゲルマン語の結果構文の分布を考えてみよう。次の表は都築 (2004) の表 1 (p. 99) に、移動動詞の補語動詞転換の可否を右端に加えたものである。

表 1 結果構文の分布

	本来的結果構文(5)	他動詞型派生的結果構文(6)	自動詞型派生的結果構文(7)	移動動詞の補語動詞転換(2)
英語	PP/ AP	PP/ AP	PP/ AP	可能
独語	PP	PP/ AP	PP/ AP	不可
オランダ語	PP/ AP	PP/ AP	PP/ AP	不可
フランス語	PP	*	*	不可
西語	PP	*	*	不可
イタリア語	PP	*	*	不可
日本語	ATP (形容詞タイプ句)	*	*	不可
韓国語	ATP	*	*	不可

表 1 での結果構文のタイプは、それぞれ次のものを意図している。構文名は都築 (2004) のものである。

(5) 本来的結果構文

The pond froze solid.

(6) 他動詞型派生的結果構文

He pounded the gold nugget flat.

(7) 自動詞型派生的結果構文

He sang himself hoarse.

表1にあるように、ゲルマン語である英語、ドイツ語、オランダ語では、可能な結果構文・結果述語のタイプはほぼ共通している。一方、(2)のような移動動詞の補語動詞転換は英語のみで可能であり、ドイツ語やオランダ語では補語動詞転換は許されないようである。結果構文での結果述語が補語的なものであるとすると、結果構文も補語動詞転換も、どちらも本来補語を取らないはずの動詞が補語を取っている、という共通点があることになる。その観点から、以上を(8)としてまとめる。

(8) 「補語」を取らないはずの動詞と共起する「補語」の分布

	英語	ドイツ語・オランダ語
移動動詞の補語動詞転換	○	×
結果構文	○	○

(8)の結果は、(i)結果述語は補語ではないというものと、(ii)英語にはドイツ語やオランダ語にはない要因があり、そのため英語でのみ移動動詞の補語動詞転換が可能なのであるというものの、二通りの結論を導くことができる。本稿では(ii)の立場を選択し、以下で(ii)の「英語にあってドイツ語・オランダ語にはない要因」を考察する。しかし(i)を選択しなかったのは、表1の観察だけでは(i)の結論を導くことはできないということであって、結果述語は補語であるという主張を本稿で展開することはない。派生的結果構文がなぜゲルマン語だけで許されるのかという問題は非常に魅力的なものではあるが、本稿ではそこに立ち入る余裕はない。

2.2 Become

Become は現代英語の典型的な補語動詞である。Become にあたるものは、ドイツ語では werden, オランダ語では worden である。OED によれば, become は OE 期には come の意味を持つ移動動詞であり, 現代語の「～になる」の意

味はドイツ語・オランダ語のものと同根の *weorþan* が担っていた。なお、OE 期の *become* は「～が起こる」という用法もあったが、それは「来る」の主語がイベント類である時の意味であるに過ぎず、本稿の議論には特に関係してこない。

(9) *Hannibal to þam lande becom.*

Hannibal to that land came

“Hannibal came to that land.” (c885 K. *Ælfred Oros. iv. viii. § 3*;
OED)

OED によれば、*become* が「～になる」の意味で使われている最初の 2 例は初期 ME の(10)である。

(10) a. *Þa bicom his licome swiðe feble.*

then became his body very feeble

“Then his body became very feeble.” (c1175 Lamb. Hom. 47;
OED)

b. *And þus bicam ure lafdi mid childe.*

and thus became our lady with child

“and our lady became pregnant.” (c1200 Trin. Coll. Hom. 21;
OED)

OE 期に「～になる」の意味を担っていた *weorþan* は *worth* という形で 16 世紀まで使われ続けた。OED の最後の例は 1513 年である。一方「来る」の意味から出発した *become* は(10)のように 12 世紀から「～になる」の意味を担い始め、*weorþan* を駆逐することになる。ここでは *become* の意味変化の要因や *weorþan* の衰退の要因については考察しない。本稿の目的にとって重要なのは(11)である。

(11) 英語・ドイツ語・オランダ語の “become” 動詞に関する事実

a. 英語の *become* はもともとは移動動詞であった

- b. 移動動詞でない *weorþan* は英語では衰退した
- c. ドイツ語・オランダ語の *weorþan* の同根語は今でも使われている
- d. ドイツ語・オランダ語の *become* の同根語は *come* の意味でしか使われない

(11)の観察から、本稿では(12)を主張する。

- (12) ドイツ語・オランダ語で移動動詞の補語動詞転換がなく、英語でそれがあるのは、移動動詞であった *become* が補語動詞の中核に位置付けられているからである。

冒頭で見た(2)のような移動動詞の補語動詞転換は、「状態変化は移動」というメタファーが関与していることは間違いない。しかしそれは決定要因ではあり得ない。なぜならそのメタファーはドイツ語やオランダ語でも有効であるはずであり、よってドイツ語やオランダ語でも補語動詞転換があることを予測してしまうからである。そのため本稿では(13)のように考えることにしたい。

- (13) メタファー「状態変化は移動」は、それ単独では移動動詞の補語動詞転換を引き起こす力はなく、(12)のような引き鉄があってはじめて発動する。

ここで、「話者に語源的知識を要求する説明は受け入れがたい」という反論が思い浮かぶかもしれない。その反論自体は、一般論としては有効かつ必要な考え方である。(13)で言う引き鉄は *become* の語源を意図している。よって(13)では *become* の語源を決定的要因として含んでいる。そのためその反論に対して手当てしておく。実はその反論は、*become* に限っては当てはまらない。*Become* の *be-* は英語で勢力の強い接頭辞であり、語根は *come* である。*Come* は英語のいつの時代でも一貫して移動動詞である。よって、*become* はいつの時代でも話者には「*be-*+移動動詞」として意識されてきたはずである。よって、*become* がもともとは移動動詞であったことは、いつの時代の話者にも一目瞭然であったと考えられる。

2.3 年代の検証

(12)+(13)の仮説が正しいとしたら、become が補語動詞となっではじめて他の移動動詞の補語動詞転換が可能になったはずである。そこで、(2)であげた移動動詞の、補語動詞としての OED 初例を(14)にあげる。

- (14) a. The siege of Leyden continued, & their victuals went very low.
(1583 T. Stocker tr. Civ. Warres Lowe C. i. 117)
- b. þen come þe propheci alle clere Ðat spokin was of þat
then came the prophecy all clear that spoken was of that
childe dere.
child dear
“Then the prophecy that was spoken about the glorious child
became all perspicuous.” (c1340 Cursor M. 11615 (Fairf.))
- c. Therwith he turned pale colour. (1450 Paston Lett. I. 158)
- d. Or religion Drives his wife raving mad. (1813 Shelley Queen Mab
v. 113)
- e. The man fel ryche. (1382 Wyclif Gen. xxvi. 13)
“The man became rich.”

(14)に見るように、いずれも become の補語動詞としての初例よりは新しいものである。よって、事実は(12)+(13)の予測に反しない。

2.4 補語動詞転換後の意味

よく知られているように、移動動詞を補語動詞として使うと、本来的な補語動詞にはない意味合いが含まれる。小西 (1980) は、(2)のそれぞれの移動動詞の補語動詞用法では次のような意味合いが生じるとしている。

- (15) go : 通常の状態からそうではない状態への変化を表す。おもに好ましくない変化、急激な変化を含意する (後略)。(p. 660, NB45)

come : この構文では(i)「平常の状態」への変化を表す場合と(ii)話し手などが「心理的・物理的に深く関わる」場合がある。(中略) (i)の「平常の状態」は「好ましい状態」「期待される状態」に通じる(後略)。(p. 270, NB32)

turn : turn は become に通例置き換えられるが, turn には「最初の状態が変化して別の状態になる」のようにいわばもとの状態との「ズレ」が意識されている。become にはとくにこのような意識はない。[cf. When I grow up I intend to be a doctor. 大きくなったら医者になるつもりだ/*When I grow up I intend to turn a doctor. [Gruber, p. 147]] (pp. 1664-5, NB16)

drive : 「(家畜・動物などを) 駆り立てる」「追い立てる」「追いつめる」というのがこの語の基本的な意味。その際, 'S drive O' の型で「SがOの意志を無視して強引に駆り立てる」ことが表される。(後略) (p. 462, 「概説」)

fall : (前略) ちなみに, fall ではしばしば「事態の変化が不幸なことである」という含みがみられ, (後略) (p. 533, 「概説」)

補語動詞として用いられるからといって, 本来の意味が失われなければならない理由はないため, これらの動詞が補語動詞用法でこのような意味になることは特に不思議なことではない。(15)のような意味合いの出所は本来の意味であることには異論の余地はないであろう。本稿の興味は, なぜ(15)のような意味合いがあるのかではなく, (15)の意味合いを持つことになる動詞を補語動詞として使うメカニズムは何かという点にある。

この問いに対する一つの答えは, すでに2.1節で述べた。メタファー「移動は状態変化」が移動動詞の補語動詞転換に深く関わっていることは間違いないであろう。本節ではもう一つの理由の可能性について考察する。

日本語のオノマトペは「ガタガタする」のような動詞としても使われるが, むしろ「ガタガタと/に/の」のように, 動詞や名詞を修飾する成分としての用法の方がおそらく勢力が強であろう。それに対し, 英語では反対に動詞として使われる場合がほとんどであるように思われる。例えば, Googleで “the

car * to a stop' という条件で検索すると、次の(16)のようなオノマトペ動詞を使った例文が数多く得られる。

- (16) a. ... where the displacement of the car is simply the distance the car skids to a stop and Theta is the angle between the force and the displacement vectors.
- b. As the car screeched to a stop, Melanie catapulted more than a dozen feet forward to the curbside, hitting with great force.
- c. Then the car spluttered to a stop.
- d. The car screeches to a stop.
- e. ... when the car spluttered to a stop in stage seven with a dead engine.
- f. After a three-minute ride, the car rattles to a stop 2451 feet below the headframe.
- g. We were sailing along one of our quiet roads when the car clunked to a stop.
- h. Or the car ahead might squeal to a stop.

これらは全て「～という音を立てて停まる」という内容を表している。動詞部分は動作が立てる音だけを表しているはずなので、対応する日本語の「～という音を立てて停まる」の「停まる」という意味内容を担っているのは to a stop の部分である。動詞が含まれていない to a stop が日本語の「停まる」に相当する意味内容を持つという事実に対しては、さまざまな分析が可能であろう。これは非常に興味深い問題ではあるが、本稿ではその点にはこれ以上立ち入らず、別の機会に検討する。本稿で注目したいのは、(16)では全ての例において動詞部分は「停止状態への至り方」を表している、という事実である。これは、come to a stop や bring the car to a stop など、着点 to 句を要求する動詞と共起する場合は、動詞は to 句で表される最終状態に至る（至らせる）という意味しかないことと好対照をなしている。この違いは(17)のように図示できる。

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| (17) a. 移動動詞 [to a stop] | b. オノマトベ動詞 [to a stop] |
| ↑ | ↑ |
| 着点への移行だけを表す | 着点への移行ではなく移行の仕方を表す |

また、同じ条件で検索して得られる次の(18)のような例も同じことを表している。Googleで“the car * to a stop”という条件で検索して出てくる文は、(i) come/bring to a stop のような移動動詞か、(ii)オノマトベ動詞を使った(16)のような文がよく見られるが、(18)はそれ以外のものを集めたものである。この3通り以外にはないようである。

- (18) a. Then at that thought there was a splutter from the engine and the car slowly coasted to a stop.
- b. Barboa slumped down in his seat and the car rolled to a stop.
- c. About a quarter of a mile in front of the gate, the car slowed to a stop...
- d. Her head snapped back, bouncing on the headrest as the car slid to a stop with the right wheels just inches from the drainage ditch.
- e. was vaguely uncomfortable with a dull whine when the car was decelerating to a stop.
- f. The car lurched to a stop.
- g. As the car jerked to a stop at Union Street, he jumped off and headed east up the hill to his mother's place on the north slope.
- h. The car glides to a stop outside an office block.

これらの例では、全ての例で動詞はオノマトベの場合と同様、着点への移行を表す意味はなく、移行の仕方を表していることに注目したい。例えば(18 a)では車は惰力走行して停まり、(18 b)では転がって停まることを表している。このように、come to a stop などの移動動詞を使った場合と違って、(16)や(18)では、状態移行を表しているのは to a stop であり、動詞部分はそこへ至るまでの様

態しか現していない。このような表現法が英語で可能なのは、(i) to が他言語での to 相当語と違って動的な意味を持ち、(ii) to の目的語が(同形の動詞を背景とした) 状態名詞であるからであると考えられるが、本稿ではこれ以上はこの問題には立ち入らない。ここで注目したいのは、非補語動詞+状態(移行)表現という組み合わせで、動詞が状態へ至る様態を表す構文が英語にはある、という点である。この観察自体は特に新しいものではなく、例えば Talmy (1980), Jackendoff (1990), Goldberg and Jackendoff (2004) などですでに報告されているものである。しかしそのような観察がなされている研究においても、その観察を移動動詞の補語動詞転換に応用したものはなさそうである。本稿ではそれを試みたい。

(15)で、移動動詞を補語動詞に転換した際に、移動動詞の本来の意味が補語動詞の用法でも残っているという観察を紹介した。本来の意味が残っている理由として、補語動詞転換という操作を受けても本来の意味が失われる理由はない、という見方をしてしまえば、(15)の事実は特に興味深いものではなくなる。当たり前のことを言っているに過ぎないからである。しかし上で見た(16)と(18)での共通点、すなわちこれらの文では、「動詞部分は to a stop で表される状態への至り方を担っている」という観察を、補語動詞転換での観察(15)と並べてみると、興味深い共通点が見られることに気付く。それは、いずれも [動詞+(移行)状態] という構成になっているという点である。(19 a) の [to a stop] は状態を表す移行表現であると上で考えた。また、(19 b) の補語も状態を表す要素である。(なお、(19 a) の「オノマトペ(動詞)」は(16)で、「移動様態動詞」は(18)でそれぞれ見たものを指す。)

(19) a. オノマトペ/移動様態動詞 + [to a stop]

状態への移行の様態を表す

b. 移動動詞+補語

本来の意味を残し持つ ← 従来の見方(転換を結果として見ている)

よって、(19 a) と (19 b) は基本的な意味構造が同じであると考えられる。

そうならば、(19 b) で移動動詞が「本来の意味を残し持つ」のは、補語動詞転換で本来の意味が失われる理由がないからではなく、(19 a) の場合と同様に、

(19 b) でも補語が表す状態への移行の様態を表すためにあえて移動動詞が用いられているからなのではないか、という、従来とは違う見方が可能になってくる。従来の見方では、補語動詞転換を結果として受け入れ、それは当然のこととして、(19 b) の意味を考えている。しかし本稿では、それとは逆方向の考え方を取ってみたい。すなわち、英語では状態への移行を表す構文で、動詞部分を状態移行の様態を表す機能に言わば格下げできるため、それを利用して移動動詞の補語動詞転換が行われるのである、という考え方である。その考え方のもとでは、移動動詞は補語への状態移行の仕方に色をつけるためにこの構文で用いられているということになる。

(20) a. オノマトペ/移動様態動詞 + [to a stop]

状態への移行の様態を表す

b. 移動動詞+補語

状態への移行の様態を表す ← 本稿の見方 (転換を手段として見ている)

Come to a stop は、ただ停止状態に至る、ということを書いているに過ぎない。一方、(20 a) にあたる screech to a stop は、停止状態への至り方を述べている。本稿の提案は、移動動詞の補語動詞転換においても、それと全く同じものとして見てみよう、というものである。すなわち、become bad は、単に悪いという状態になる、ということを書いているに過ぎない。一方、go bad は、悪いという状態への至り方を、go という移動動詞を使って述べている、ということを書いているのである。このような見方のもとでは、(15) は次のように書き換えられる。

(21) go: 中心から離れて補語の状態に至る

→ 悪い状態に向かう

come: 中心に向かうことにより補語の状態に至る

→ よい状態に向かう

turn：回転することにより補語の状態に至る

→ サイクルなど、状態変化のコースがある (cf. (13)の記述)

drive：駆り立てられることにより補語の状態に至る

→ 望まない状態に向かう

fall：落ちることにより補語の状態に至る

→ 悪い状態に落ちる

以上をまとめる。英語では、状態への移行の仕方を、(i)移行を表わす動詞を用いて移行だけを表す言い方と、(ii)オノマトペや移動様態動詞のように移行自体は表さない動詞を用いて状態移行の様態を表す言い方がある。本稿で問題にしている移動動詞の補語動詞転換は、(ii)の場合と同じメカニズムを用いており、そのような用法では、補語の表す状態への移行の様態を表すために、本来は補語動詞ではない移動動詞を用いているのである。このことは、言い換えれば、移動動詞の補語動詞転換では、移動動詞の様態だけを利用していても見ることができだろう。移動の意味ではなく、移動の様態しか使っていないということである。そう考えると、それでは補語動詞転換がなぜ移動動詞に限られるのか、という疑問がわく。それに答えるものが、メタファー「状態変化は移動」である。

2.5 移動動詞の補語動詞転換についての結論

- (22) a. 非移動動詞+to a stop に代表される、[動詞+ [動詞を用いない状態(移行)表現]]での動詞の様態表現への「格下げ」が、補語動詞転換を動機付けている。
- b. 移動動詞が補語動詞として用いられるのを許しているのは、メタファー「状態変化は移動」である。
- c. (a, b) だけでは、補語動詞転換が英語にあってドイツ語・オランダ語にはないことが説明できない。よって次の補助仮説が必要である。

「移動動詞の補語動詞転換が英語にあるのは、補語動詞の中心的存在であ

る become が、他の言語とは違ってももとは移動動詞であったことによる」

3. 結果構文への含意

移動動詞の補語動詞転換については、形容詞が補語であるものだけを見てきた。また前置詞 to は、2.4 節で見た動詞の様態表現への「格下げ」において決定的に重要な役割を果たしている。更に本稿では、(22 a) のように、補語動詞転換でも、その「格下げ」が行われていると結論づけた。

さて、結果構文では、結果述語は形容詞か PP であるが、その PP は多くの場合 to または into である。このように、結果構文では、状態を担う部分は、上で見てきた動詞の「格下げ」すなわち様態表現化が起こる構文と同じものを使っている。ところで、オノマトペ/移動様態動詞での格下げと、移動動詞の補語動詞転換は、「格下げ」では共通するが、当然別の構文である。よって、結果構文に関しても、次のような作業仮説を想定することが可能である。

(23) 結果構文分析の作業仮説

- a. 動詞の様態表現への格下げが関与している
- b. 結果述語が形容詞であるものと PP であるものとは性格が違う

PP：状態移行表現として PP を使う点で [オノマトペ/移動様態動詞 + PP] と平行的

＝状態移行は PP が担う

形容詞：補語動詞転換と形容詞である点で平行的

＝動詞がある意味で補語動詞化することにより AP を取ることが可能になる

先に表 1 で見たように、いわゆる本来の結果構文は、言語タイプに関わらず可能な場合が多い。よって、見通しとしては、(23) は派生的結果構文を考える際の作業仮説となるだろう。実際、(23 b) では「状態移行は PP が担う」としてい

るが、本来的結果構文では影山 (1996) 等が言うように動詞自体が状態移行の意味を持つため、本来的結果構文では状態移行を PP が担う必要はない。紙幅の都合で(23)の展開は別の機会に譲らざるを得ないが、見通しとしては、補語動詞転換では動詞のタイプの変換が強い形で起こっているのに対し、オノマトペ/移動動詞+to a stop の場合には、動詞のタイプ変換が弱いものに留まっている、という違いが重要なものになってくるものと考えられる。本稿が、英語での補語動詞転換という現象の分析が結果構文の考察に新たな可能性を与えたとしたら、本稿の目的はそれなりに達成したことになる。

参考文献

- Goldberg, A. and R. Jackendoff (2004) "The English resultative as a family of constructions," *Language* 80, 532-68.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』, 東京, くろしお出版。
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』, 東京, 研究社。
- Lakoff, G. (1993) "The contemporary theory of metaphor," in A. Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (second edition), 202-251, New York: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, New York: Basic Books.
- Talmy, L. (1980) "Lexicalization patterns: Semantic structures in lexical forms," in T. Shopen et al. (eds.), *Language Typology and Syntactic Description*, vol. iii. New York: Cambridge University Press. Revised version in L. Talmy, *Toward a Cognitive Semantics*, vol. ii. Cambridge, Mass.: MIT Press, 21-146 (2000).
- 都築雅子 (2004) 「行為連鎖と構文 II : 結果構文」, 中村芳久 (編) 『認知文法論 II』, 89-135, 東京, 大修館書店。

Synopsis

From Motion Verbs to Complement-Taking Verbs:

A Case of English Verbal Type Shift and Its Implications to the Resultative Construction

Kozo Kato and Masako Tsuzuki

Languages have a set of complement-taking verbs such as *be*, *become* and *make*, but English has an extra set of complement-taking verbs. In English, using motion verbs such as *come* and *go* as complement-taking verbs is allowed, as in *Milk went bad*, whose meaning is similar to sentences with *become*. This is not possible, however, in other Germanic languages like German and Dutch, as well as in other European languages.

A partial explanation to this fact comes from the metaphor “changes are movements” (Lakoff and Johnson (1999)); the verb *go* can be used like *become* because *go* denotes motion and motion can be equated with change of state, and thus a complement can follow. This explanation, however, is not a very satisfactory one, since this kind of verbal type shift can only be found in English but not in other Germanic/European languages, and since the metaphor is supposed to be language-universal. Therefore, there must be a trigger which enables a language to implement the effect of this metaphor on the type shift in question.

Become is a typical complement-taking verb. The verbs in German and Dutch equivalent to *become* are *werden* and *worden*, respectively. In the Old English period, *become* was not a complement-taking verb, but a full motion verb. The OE equivalent to Present-day English *become* was *weorþan*. It became obsolete in the course of time, and *become* took over its position, losing its motional meaning. *Become* consists of the prefix *be* meaning *by* and the stem *come*, the latter a typical motion verb. Thus, English has a typical complement-taking verb whose stem is a typical motion verb, but German and Dutch don't. This is the trigger that enables the metaphor to exercise its power on this type shift.

There is another factor that helps the type shift. In English, there are

two sets of verbs which can be used in “the car V to a stop” other than *come*. They are onomatopoeic verbs and manner of motion verbs, as in “the car screeched/rolled to a stop.” A kind of “downgrading” of verbs is seen here; the verb part expresses the way the car stopped, and “to a stop” expresses the final situation of the whole event. The formula here is [downgraded verb+state expression]. Notice that the same formula is found in sentences where a motion verb is used as a complement-taking verb like “Milk went bad.”

There is a conspicuous difference between the two cases, however. In the case of (i) “the car screeched/rolled to a stop,” the part expressing state is a PP. In the case of (ii) “milk went bad,” the part expressing state is an adjective. This categorial difference reminds us of the two kinds of the so-called resultative predicates; “he pounded the metal [*flat/into a thin film.*]” Arguably, in both cases, there is some downgrading effect on the verb. It is known that the distribution of PP resultatives and that of adjectival resultatives are different, and this wants an explanation. The analysis in this paper may give a hint to this; downgrading is effective both in (i) and (ii), but verbal type shift is stronger in (ii) than (i).